



協同の歴史の瞬間

第114回

賀川豊彦の「乳と蜜の流るゝ郷」 (その18)

1935(昭和10)年9月号

平泉を中心に東助への攻撃が始まる
村の更生のため、東助、組合の理事を辞職する



監修 堀越芳昭
山梨学院大学 元教授

秋を迎えた大塩村は木の実に恵まれた。「農村産業組合学校」における藤島講師の「立体農業」からヒントを得た青年たちが養豚、養鶏など新しい農業を模索し始める。

東助は、外部の援助もなく電灯料金値下げ等を目的に「演説会」を開催する。演説する東助に近づいた平泉は、平手で東助を殴るが、逆に登壇した土方の連中に殴られ、留置場に留め置かれた。

留置場を出た平泉は、東助への攻撃を始める。攻撃は、山根派の新聞も悪用され、気の強いお竹まで東京に行く、と言わせ、お竹と鈴子は東京に向かう。

平泉は、県会議員の補欠選挙等も利用し、東助を追い詰め、東助は遂に、組合の理事を辞職する。

■ 木の実を活用した養豚、養鶏などの新しい農業への模索が始まる

いろんな妨害を受けつつもお盆の時期に開校した「農村産業組合学校」はなんとか終了することができた。秋を迎えた大塩村は木の実に恵まれる。

ドングリ拾いがはじまった。学校の先生は気をきかせて、昼から学校を休みにした。それで、子どもらはみな、袋を持って、山にはいった。

あるわ、あるわ、ナラ、小ナラ、クヌギ、クリ、ブナ、アベマキ等の穀斗科のものをはじめ、鬼クルミ、トチ、ハシバミの堅果が、どこの山にも捨てるほど落ちていた。カヤの実も、いたるところに落ち



ていた。子どもたちは、それを拾い集めると、東助が中心となっている養鶏組合の青年たちが、それを袋に詰めて、ウマに積み、産業組合まで運んで、あるものを製粉した

それがわずか二日間の中に、五十石以上も集まった。村の人々は驚きの目をみはった。(略) 島貫伊三郎の喜びは非常なものであった――

山腹でドングリを拾い集めていた子どもは帰った。森は静かになった。

島貫は、トチの実を詰める袋の口を持っていた田中高子に言った。

「こんなに、ドングリが、家畜の飼料になるということを、もう少し早く知っていれば、もう少し早く集めるとよかったね……ほんとに惜しいことをしたね」

これに対し高子も次のように応じた。

「これじゃ、この村も復活しそうね。養鶏と、養豚も飼料の問題を解決したから、労賃だけに回りさえすれば、いいわけね」

伊三郎は、高子の美しい鼻筋を見つめて答えた。

「まったく助かるね、ウサギも、ヤギも、ヒツジも、コイも、そして人間も、これで飼えるっていうから、たいしたもんだよ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、藤島先生は、まったくいいことを教えて帰ってくれたもんだよ……それに、東助君は、今後、たくあんも販売事業でやると言っているねえ。きょうあたり、樽が百ぐらいも、若松から着くはずだよ」

大塩村の農業も養蚕中心の農業から、これまで見向きもしなかった木の実を飼料として養鶏、養豚などの新しい農業へ挑戦しようとする青年の姿が描かれている。そしてそのヒントを与えてくれたのが「農村産業組合学校」での藤島講師の「立体農業」だったのである。新しい農業への挑戦は、それだけにとどまらず「たくあん販売事業」という産業組合の新しい事業も作り出したのである。

ここでも賀川は、農村の苦境を救うために「立体農業」の必要性和産業組合の在り方を強調したのである。ただ、このたくあん事業をめぐる問題が東助を苦しめることになる。

■ 東助、自力で「電灯料金値下電力利用組合促進演説会」を開催

平泉又吉が組合の内部にしながら、あらゆる妨害を東助の産業組合運動に加えてくるため、東助も沈黙していることができなかった。

で、彼は十月一日、外部から何等の応援もなかったけれども、喜多方劇場を借りて、“電灯料金値下げ問題と聞いて、来るわ、来るわ、定刻前から、喜多方劇場は満員になった。流言ひ語が放たれた！そして、山根の一派が、演説会の打ちこわしに土方を乗り込ませて、東助をひどい目にあわせ

るというデマもあった。

その晩、東助と伊三郎の二人が大塩川の水利問題を中心にして地方の人々に訴えた。はたして、山根派のゴロツキが、おおぜい、二階のさじきに、頑張っていて、島貫の演説中、猛烈なやじを試みて、彼を演壇からおろしてしまった。

そのあとに東助が立った。

「売国奴！ 引っ込め！」

「こら、ロシアのイヌ、死んでしまえ！」

最初、ゴロツキは、大声にやじりだしたものの、参加者の多くが組合の者であったので、群衆は東助に同情し、ゴロツキも静かになった。東助は論旨を進めた。

二階のすみっこから、平泉又吉が大声でどなった。

「貴様がなにを知るか？ くそ！ 共産主義者！」

「だまれ！」「シッ！」

東助は、聴衆が彼を支持してくれているのを知ったので、さらに一段声を張り上げた。(略)

そう言っている瞬間、廊下に、平泉又吉が現れた。彼は小走りに、東助の演壇まで近づき、いきなり、平手で東助のほっぺたをなぐりつけた。

「こら！ 共産主義者！ 演壇をおりろ……」

それを見た平場にいた土方の一人が、周囲にすわっていた土方をさし招いて、演壇にかけ上がった。彼等は平泉を応援するかと思っていると、たちまち平泉を取り巻き、げんこでなぐりつけた。巡査が飛んできた。それを見た土方の連中は、クモの子を散らすごとく、さっと演壇から姿を消してしまった。ばかをみたのは平泉であった。警察署に連行され、その晩、留置場に投げ込まれた。

その混乱が収まると会場は静かになり、東助は、電灯料値下げ問題を論じ、農村の電力利用組合の必要性を説いて九時半ごろ閉会した。東助は、村から応援に来ていた青年、娘たちと「乗合」一台を借り切って村に帰る。その道中、話題になったのが土方による平泉に対する殴打の件であった。村を歩いて事情に詳しい渡辺は、次のように言って皆を笑わせた。

「あれはね、測量に来ていた土方連中が、平泉に貸銀の貸しがあるのを催促したところが、くれないので、ストライキをするといっていたんだよ。そこへ平泉が、なまいきなことをするので、彼をなぐってしまえということになったんだそうな……土方の一人が小屋の中で、そんな話をしていたよ」

■ 留置場から出てきた平泉の東助への攻撃が始まる

留置場から出てきた平泉は、「東助が土方をせん動してなぐらせた」という難癖をつけて東助への攻撃を始める。

まず、平泉の父が東助に「小作人の身分で、世話になった地主の息子を警察に拘引させるということがあるか？」と迫ってきた。この場合は、お竹がうまくさばいて父親を帰らせた。

しかし、おさまらないのは平泉であった。彼は産業組合の脱退届を井田組合長につきつけた。そして山根派の新聞に、大げさに、彼の脱退を左翼運動に対抗するためでもあるかのごとく書かせた。山根派の新聞もまた(略)、東助の悪いことをほとんど毎日のように書きたてた。その「見出し」は“耶麻の左翼陣営”というのであったが、書くわ、書くわ、あることないことすべてを書きたてた。そして、どこで知ったか、東助の妹が大連で娼妓をしていることまで新聞に暴露した。

その新聞宣伝は、東助にとって、まったく致命傷であった。鈴子の過去も、お竹の妾生活のことも、芸者屋をしていたことも、すっかり書いてしまった。気の強いお竹までが、その新聞を見て、二日間も寝込んでしまったほど、激烈なものであった。

「ね、わたし、東京に出たいと思うが、あなたも行ってくれない？」

これに対し、東助は次のような理由でしばらく村に残ることにした。

「おかあさん……あなたと鈴子だけ、一足先に東京にお出ましくださらないでしょうか？ わたしはもう少し『地割』の土地利用組合を整理したり、医療組合や、組合製糸をきちんとさせて、島貫君一人になっても、充分やっていかれるようにしておかんと、せっかく、おかあさんが、村のために尽してくださった努力が、水泡に帰しますからね……」

これを聞いたお竹は、納得し翌日、鈴子と二人で東京に向かう。

■ 平泉中心に東助への攻撃が激化。東助、組合の理事を辞職する

平泉はさらに東助を追い詰める。県会議員の補欠選挙が予定され、斎藤朝吉が、平泉の考えをくんで山根派の唯一の候補者として立候補すると言いだした。選挙事務長に柿ノ木省七が推された。

ただ、斎藤朝吉は、社会的地位を少しも持っていなかったために、彼がにらんだのが村の産業組合長のいすであった。これまでの関係から井田組合長は組合長のいすを斎藤に譲ると言明した。

これに対して木内の老人は、「成立してから半年もたたないのに、組合長をすぐ替えたといって、県庁に届け出るのは恥ずかしいから、おれは反対だ」と柿ノ木省七に言った。

こうしたことなどから候補者の話は進まず、柿ノ木省七は焦った。彼は、平泉と共謀して、沢庵(たくあん)販売組合の売上代金に不正があると言って、帳簿の検査を始めた。「沢庵」の事業すべてを任されていた島貫は、未回収金の価格を明瞭に帳簿に書いてなかったただけであったが、平泉は山根派の新聞に、産業組合の不正事件として、大きな活字で書かせた。

そして柿ノ木は東助に「むりなことを言うようじゃが、きみは組合の理事をやめてくれんか。そうしなければ、この問題は片がつかんぞ。……まあ、組合の将来のことを思って、そうしてくれたまえ！」とにが笑いをしながら言った。

村の更生のためには、すべてを捨てかかっている東助は、即座に答えた。

「話はわかりました。喜んで、理事を辞職しましょう」

そう言って、すらすらと辞職届を半紙に書いて、印鑑をついて渡した。

こうして、東助の大塩村での奮闘は一時中断されることになった。

<参考文献>

『家の光』(昭和10年9月号)

*文章の引用部分は復刻版『乳と蜜の流るゝ郷』(2009年)を参考にした。

*文中に今日の人権意識に照らして不適切と思われる語句や表現が使われていますが、作者が故人であり、また、差別助長の意図で使用していないこと、作品の時代背景を考慮し、原文のままとしております。